

「第二の家族」

原田菜津(北園高校)

私たち日本人の参加者 5 名は、ワークショップ期間中ウロシュ・プレディッチ・ギムナジウムの生徒宅にホームステイをさせて頂きました。4月4日の午後、私たちがベオグラード空港に着くと、ホストファミリーの方々が空港まで迎えに来てくれました。私のホストシスターのヨバナは、去年の夏に日本の私の家にホームステイしていたので再会という形になりました。約半年ぶりに会うことができてとても嬉しかったです。

ヨバナの家は二世帯住宅で、一階にヨバナのお祖父母さんとお祖母さんが、二階にヨバナのお父さん、お母さん、妹、そしてヨバナが住んでいました。初日は、空港から家に着いてまず家族の皆さんに和柄の雑貨や T シャツ、手ぬぐいなど日本ならではのお土産を渡しました。その後はお祖父母さんとお祖母さんも一緒に家族揃って昼食を食べました。初日も含め、セルビアでは毎日の食事を楽しむことができました。食事は日本とは違い、夕食より昼食の方が量が多かったです。夕食にクレープを食べた日もありました。日本ではあまりないことですが、ヨバナは「妹と私はよく食べるよ」と言っていました。美味しく頂きながらも、日本との食文化の違いを感じさせられました。

2 日目から本格的にワークショップが始まり、家にいる時間が少なくなりましたが、その分家にいる時は家族の皆さんとたくさん触れ合うことを意識しました。しかし私はセルビア語が、ご両親は日本語とドイツ語がわからないため、ヨバナが通訳をしてくれて、上手くコミュニケーションをとることができました。

ホームステイに関して印象深い思い出があります。ヨバナの叔母様の誕生パーティーに私も参加させてもらいました。親戚が 15 人ほど集まっていて少し緊張していたのですが、皆さんは笑顔で迎え入れてくださいました。叔父様が一生懸命日本語を覚えてくれたり、叔母様が美味しい食事を出してくれたり、たくさんおもてなしをしてもらいたくとも感動しました。初めて皆さんにお会いしたことを忘れててしまうくらい、家族の温かさを感じることができました。

その他にもホームステイでの思い出はたくさんあります。それも私を受け入れてくださったヨバナ始めドネヴスキ家の皆さんのおかげです。ご両親とは言語の関係で直接コミュニケーションをとることはできませんでしたが、言葉は通じなくても心は通じ合うことができました。そしてヨバナはいつも私のそばにいてくれて、私が困っている時はすぐ助けてくれました。ヨバナには感謝してもしきれません。

ドネヴスキ家のみなさん、私のことを受け入れてくれてありがとうございました。いつかまた会ってこの恩返しができれば、と思っています。